

総合資源エネルギー調査会
省エネルギー・新エネルギー分科会 新エネルギー小委員会
バイオマス持続可能性ワーキンググループ（第 32 回）
議事要旨

○日時

令和 7 年 8 月 28 日（木） 18 時 30 分～20 時 15 分

○場所

オンライン開催

○出席委員

高村ゆかり座長、相川高信委員、河野康子委員、橋本征二委員、道田悦代委員、吉岡拓如委員

○オブザーバー

栗田 徹 農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課 再生可能エネルギー室 室長
齋藤 綾 農林水産省林野庁林政部木材利用課 監査官
吉野 議章 環境省地球環境局地球温暖化対策課 課長

○事務局

妙中 省エネルギー・新エネルギー部 新エネルギー課 課長補佐
森川 省エネルギー・新エネルギー部 新エネルギー課 課長補佐

○議題

- ① 第三者認証スキームの追加等について
- ② ライフサイクル GHG 自主的取組のフォローアップについて

○議事要旨

- ① 第三者認証スキームの追加等について

委員

- ・ PEFC については各国の森林認証制度との相互認証が進んでいるが、ライフサイクル GHG については、メルクマールとの整合を条件として相互認証が進められるという理解でよい。

委員

- ・ PEFC を認めることに賛成。なお、相互認証を前提としたスキームであると理解。

- MSP0-CoC を認めることに賛成。また、認証範囲が明確化されたと理解。

委員

- PEFC と MSP0-CoC を認めることに賛成。様々な認証制度の追加により事業者の利便性が向上されることを期待。
- 様々な認証スキームの整合性が世界的に整理される流れにあり、日本においても様々な認証スキームに軸を通すような ISO について注視する必要。

委員

- PEFC と MSP0-CoC を認めることに賛成。燃料調達の選択肢が広がり、適正な燃料使用が確保されることに期待。
- 第7次エネルギー基本計画等において、脱炭素電源の確保は重要であり、バイオマスに対する期待は大きいと認識。他方、輸入木質バイオマスについては脱炭素電源として活用を進めてよいのか悩ましい。FIT/FIP 制度の下で、本当に地球温暖化・脱炭素に資するかという視点でも検討を進めるべき。

事務局

- PEFC の相互認証について、ライフサイクル GHG 確認のメルクマールが担保されるよう、基準文書の策定状況をフォローアップする。
- 輸入木質バイオマスを脱炭素エネルギーとして考える上で、森林吸収源も関係するため、林野庁とも相談しながら検討を進めたい。

座長

- PEFC・MSP0-CoC の追加については異論なしと確認。PEFC については相互認証を前提としたスキームであると認識。
- 追加した第三者認証スキームについては、変更の有無や運用上の課題を一定の期間毎にフォローアップが必要。

② ライフサイクル GHG 自主的取組のフォローアップについて

委員

- 燃料種毎にライフサイクル GHG を計算する必要性について意見はあるか。より厳しい基準となった場合に、発電所単位で基準をクリアする考え方が出てくる可能性がある。

委員

- 個別計算は、どのような部分で既定値との違いが大きいのか教えてほしい。

委員

- BPA 報告において輸入木質チップに 70%削減水準をクリアしていないものがあるが、今後どのように削減を進める見通しか。
- 今後、計算方法が定まると、実質的にどのように削減を進めるかが論点。ベストプラクティスの紹介があると、今後の安定供給の見通しも立てやすい。

委員

- 燃料の需給を含め事業環境が厳しくなる中、バイオマス発電事業を推進していく上で、ライフサイクル GHG に対する認識は。
- BPA 報告において、輸入木質バイオマスの調達国の回答が少ない理由は。

委員

- 自主的取組のカバー率向上のため、連携の可能性のある他の団体等はあるか。

座長

- 自主的取組への参加者は増えているが、一方で情報を開示しない事業者も存在。情報開示ができない理由として、どういうことが問題なのか。
- 業界団体等でカバーされない事業者や発電能力等は、全体のうちどの程度か。
- BPA 報告において基準値を超過した件数の記載があるが、これは発電所数ではなく、燃料調達をブレイクダウンした数字か。
- 木質協の報告において国内木質バイオマスのライフサイクル GHG 算定値のバラつきが大きい理由は。

バイオマス発電事業者協会（BPA）

- 燃料種毎にライフサイクル GHG を計算する必要性については、特に反対の声はない。ただし、今後基準を強化する場合は、事業者ごとの考え方が出てくると思う。
- 個別計算については、ペレット工場のエネルギー使用量や海上輸送距離を実態に合わせ計算しているため、保守的に設定されている既定値よりも下がると理解。
- 輸入木質チップのライフサイクル GHG 削減に向けては、輸送船の実態に合った計算を行うことや、実際の輸送効率向上が考えられる。
- カーボンプライシングや需要家目線などマーケットの後押しもあり、ビジネスモデルにつなげるためには、ライフサイクル GHG の削減は重要。
- 調達国の回答が少ない理由は、輸入木質チップを使う発電所は少ないため、具体的な調達国を公開すると競争が起きて安定調達に影響が出ることを懸念。
- 自主的取組のカバー率向上のため、電気事業連合会との連携が考えられる。
- 一般への情報公開については、発電所独自のノウハウや設計思想の流出や、調達燃料の価格や供給量の安定性への影響を懸念。

日本木質バイオマスエネルギー協会

- 燃料種毎にライフサイクル GHG を計算する必要性については、特段意見はない。
- 個別計算は、既定値による算定値が大きい場合に使い分けているのではないか。
- 国内木質バイオマスのライフサイクル GHG 削減に向けては、輸送距離の縮小や輸送ロットの拡大が重要。
- 事業者は、ライフサイクル GHG 削減の目標を達成する意識があるので、協会としてもフォローしていく。

- 自主的取組のカバー率向上のため、国内木質バイオマスは、川上・川中の燃料供給事業者の理解促進が重要。
- 国内木質バイオマスのライフサイクル GHG 算定値のバラつきが大きい理由は、輸入燃料よりもデータ数が多いためではないか。

事務局

- 自主的取組全体でのカバー率は、次回以降に事務局からお示しする。

委員

- 木質協について、FIT 認定を受けた発電事業者は、持続可能な形で事業を行う責任を負っており、どのように巻き込むかは引き続きの課題。
- 電気事業連合会の巻き込みについては、事務局でも検討いただきたい。

座長

- ヒアリングの内容、委員からの意見を踏まえ、次回以降の WG の検討に繋がるように事務局に準備をお願いしたい。

事務局

- 次回の WG については日程が決まり次第、経済産業省のホームページにて公表する。

(お問合せ先)

資源エネルギー庁

省エネルギー・新エネルギー部 新エネルギー課

電話：03-3501-4031